

目的 昭和59年度国民生活実態調査によれば、高齢者世帯の所得は初めて前年より35%下回り、所得の50.4%は年金、恩給に依存し、42.4%の人が生活の苦しさを感じているという。本研究は、このような高齢者の生活状況の中での衣生活の位置及び衣服購入の実態を明らかにし、今後の高齢化社会における衣生活のあり方を考える資料を得ることを目的とした。

方法 1. 調査対象は65才以上の男女それぞれ100名ずつとした。2. 調査時期は昭和59年11月から12月である。3. 調査方法は高齢者の参集する名古屋市内のK・N寺を中心に、参集者の中からランダムに被調査者を選び、質問紙法による面接調査を行った。4. 本報の内容は、衣生活に対する関心度、衣服購入の動機、衣服管理の実態、着衣形式別利用度を性別、年齢別、就労別、学歴別に分析したものである。

結果 1. 衣生活に対する関心度は全体に低く、約30%であった。また年齢が低く、有職で、高学歴者ほど関心度は高く、着装に対する関心が最も高かった。2. 衣服購入の動機は、男は年齢別によるばらつきが大きく、全体としては「季節の変わり目」が最も高率であった。女は年齢別によるばらつきは小さく、「気にいったものがある時」が50%と最も高率であった。またこの数年衣服を購入していない人の割合は男75才以上に多かった。就労別では有職者は「旅行」、「行事」の際に購入する割合が無職者より高かった。3. 衣服の整理は男の場合家族への依存度が高く、一人暮らしにおいても「本人」は57.1%であった。4. 和服の利用率は男より女が高く、用途別では就寝時での利用が最も高かった。